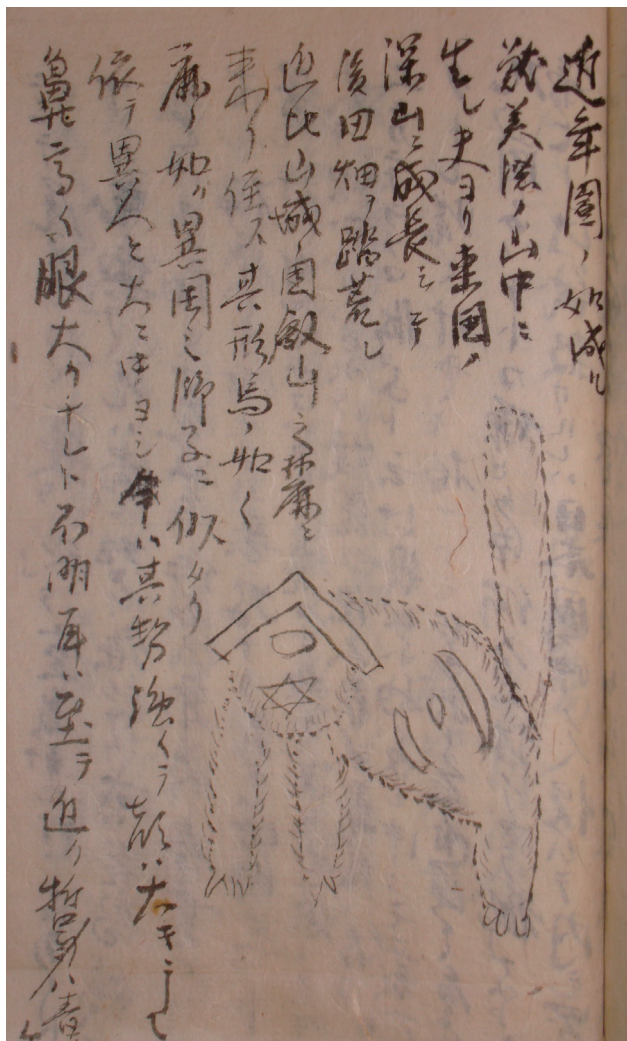


幕末の風説書



* 毛利家文庫 29風説5「諸所風説書」

解説

幕末期には情報に対する人々の欲求が高まり、「聞書」「風説書」などと呼ばれる時事情報をまとめた記録が多く見られるようになります。瓦版などの印刷物は規制・制約も多く、当時の時事情報は落書（らくしょ）・張り紙・筆写本などの手書きの媒体を介して広まりました。そこからは、人々の風刺・反骨精神が強うかがえます。

写真は、京都守護職として上洛し、配下の新選組などを使って京の治安維持にあたった松平容保（かたもり）を痛烈に批判した落書で、その姿は怪物に描かれています。「其形馬ノ如く鹿ノ如ク（すなわち馬鹿）、異国之獅子ニ似タリ、依テ異人と大ニ中ヨシ（幕府の開国を批判）」とか「餅三ツト箸シ片シ付ヤレハ、コハカリ逃ルコト妙ナリ（一に三つ星家紋の毛利家＝長州を恐れる意）」など、さんざん書かれようです。容保は公武合体派の一員として、反幕府的な活動をする尊王攘夷派の弾圧にあたり、「文久三年八月十八日の政変」（1863年）では長州藩の勢力を京から排除しました。

* この落書は全国でほかにもいくつか見つかっており、数多く筆写されたようです。

* 当館の毛利家文庫のうち「29 風説」には、幕末から明治初年にかけての風説書が数多く残っています。その中には誤報や流言、デマ等も含まれていますが、当時の人々が様々な情報を集め、比較検討しながら真実を知ろうとしたさまがうかがえます。